

—日本・アフリカ間の海を越えた大学間交流・連携の経験および展望—

8月20日、独立行政法人国際協力機構（JICA）は、日本・アフリカ大学連携ネットワーク（JAAN：Japan–Africa Academic Network）との共催で、ヨコハマ・グランド・インターコンチネンタルホテルにおいて、ハイブリッド形式で第9回アフリカ開発会議（TICAD9）JICA テーマ別イベント「日本・アフリカ間の海を越えた大学間交流・連携の経験および展望」を開催しました。

若者が増加し急速に社会が発展するアフリカにおいて、また高齢化などの新しい課題を乗り越える必要がある日本において、大学の役割はますます重要となっています。近年、日本とアフリカの大学間の交流や連携が増えており、これが双方に様々な成果をもたらしています。本イベントは、今後の大学間交流・連携のあり方をテーマに、日本とアフリカから有識者を招き、パネル・ディスカッション形式で開催しました。

開会挨拶では、モデレーターも務める京都大学・神戸大学の高橋基樹名誉教授から、日本とアフリカの関係は外交やビジネスだけではなく学術や文化の側面にも議論を広げて多元的であるべきである旨、アメリカを震源として世界的に広がる大学への反感に対応するためにも大学間の連携強化、またアフリカで質の高い基礎教育が提供されるための教員育成と日本の投資家による支援、さらに日本の学生がアフリカと接する機会の拡大、将来に日本の学界に対しても大きく貢献するアフリカ出身人材の育成への展望などの論点を提示しました。

続いて、佐藤・文部科学省高等教育局参事官（国際担当）から来賓挨拶として、活力に満ちダイナミックな成長を遂げるアフリカと、課題先進国の日本が連携を深めることは持続可能な成長に向けた可能性を広げるものである旨、JICAがアフリカの高等教育分野において数々のプロジェクトを推進し、ジョモ・ケニヤッタ農工大学、E-JUST(エジプト日本科学技術大学)といった成果を残している旨、さらにアフリカから日本への留学生は2700人いるのに対して日本からアフリカへの留学生は500人と少ないなど拡大の余地があると言及し、文部科学省として交流拡大に向けた様々な取り組みに一層力を入れていきたい旨述べられました。

ディスカッションに先立ち、武内・東京外国語大学教授から JAAN についての紹介がありました。JAAN は 2015 年に設立され、現在 41 の大学が加盟している旨、2020 年から 2024 年の間に文科省の支援を受けた「世界展開力強化事業」が 10 大学によって実施され、日本とアフリカの学生交流が進められた旨、今後日本とアフリカの大学間交流をさらに展開するためには、日本の学術界、実務家、市民社会とのネットワーキングが第一歩であり、学生の流動性を双方向でさらに高める必要がある旨、大学が社会に果たしうる役割についてもっと議論されること旨などが説明されました。

パネル・ディスカッションでは、日本とアフリカの交流における成果や教訓、そして今後の発展に向けた提案について議論しました。

武内・東京外国語大学教授は、日本とアフリカの学生が双方向に交流・派遣される必要があると主張。アフリカの学生を日本に招く際の課題である旅費をクラウドファンディングで解決した事例を紹介しながら、継続してアフリカから学生を招くためには確固たる仕組みづくりが重要ではないかとの認識を示しました。今後の発展に向けては、大学がもっと

社会に貢献する必要があり、大学が産業界や市民社会との交流を深めていくことが重要とも指摘しました。

森尾・筑波大学教授からは、筑波大学がチュニジアの大学にて行っているサマープログラムでは、日本の学生にアラビア語と北アフリカの文化を学ぶ機会を提供し、筑波大学にチュニジアから受け入れるプログラムでは日本の農業を紹介し、南アフリカの学生にはアートとデザイン、ガーナからの学生には看護をテーマに研究機会を提供している旨説明されました。森尾教授は現在は短期交流から多文化の共同学習という段階に発展しているとし、オンラインやバーチャルでの学術交流の活性化にも意欲を示しました。また、より多くの学生交流を推進するためには、魅力的なプログラムの開発や財政的支援が重要性であると訴えました。さらに、アフリカとの交流が将来のキャリア設計にどのような恩恵があるのかも合わせて提示する必要があるとの考えを示しました。

ハニー・エスシェミー・カイロ大学教授は、自身のキャリアの中で広島大学での学びが重要だったことを紹介し、「人生における大切なことは自分で見つけることができる。適切な場所に身を置くことで目的を達成できる」とのメッセージを伝えました。現在は広島大学とアフリカの大学の橋渡しも進めており、日本の大学にはもっとアフリカの大学との交流を活発にすること、民間セクターには人材交流機会を拡大してほしいと訴えました。

スカーレット・コーネリッセン・ステレンボッシュ大学日本研究センターセンター長・教授からは、日本研究センターが進める南アフリカの市民向けに行われる日本文化の教育イベント、日本とアフリカの学生・研究者交流を促進するためのフォーラムと合わせて、JICA が支援するステレンボッシュ大学、ジョモ・ケニヤッタ農工大学、E-JUST と日本の大学との（イノベーションに向けた）推進（と人材交流）を推進する取り組みを紹介しました。今後に向けては、短期的な交流プログラムの増加、日本と南アフリカで開催している学術フォーラムのアフリカ全土への拡大、データベースの共有と維持、世代間で相互に教え刺激しあう関係づくりが重要との考えを示しました。

元東京外国語大学学生（現京都大学大学院生）の小佐野アコシヤ有紀さんは、自著である『ガーナ流家族のつくり方、世話する・される者たちの生活誌』につながる人生を劇的に変えたガーナへの留学の体験を紹介。日本とガーナ双方での互いの家族ぐるみの付き合いにつながっていることや、自身の体験は特別な体験ではないとして、日本とアフリカの学生交流がより活発になることへの期待を示しました。日本の学生によるアフリカの大学との交流を日本の大学がいっそう支援し、また教員が学生の良き相談相手になってほしいと訴えました。

クリスチャン・オチア名古屋大学准教授からは、2009 年の来日からの経験が紹介されました。現在は日本の学生、アフリカの学生に向けて英語で授業を行っており、日本では科学研究費を申請するなど活発に研究を進めている旨、また日本人の同僚との差を感じることがなく対等な関係で研究ができる環境は幸せなことだとの認識を示しました。特に日本の「カイゼン」について研究を進め、現在ではアフリカでも「カイゼン」を広める活動を展開していると紹介しました。アフリカの学生には大きな夢を持ってほしい旨、交流のさらなる発展のためには学生だけでなく教職員との交流も重要である旨を指摘し、加えて Japan Society for Afrasian Studies という学会を立ち上げてアフリカと日本の研究者の交流を進めている事例を紹介しました。

閉会の挨拶では、宮本律子・秋田大学名誉教授から、秋田大学によるボツワナでのプロジェクトにおいて秋田県が誇る鉱山学校の知見が提供されていることを紹介し、最後に、“If

you want to go fast, go alone, but if you want to go far, go together.”（早く行きたいなら一人で行け、けれども、より遠くに行きたいのなら、皆で行け）というアフリカのことわざで本イベントを締めくくりました。



イベントの様子



京都大学・神戸大学・高橋基樹名誉教授



東京外国語大学・武内進一教授



（左から）筑波大学・森尾貴広教授、カイロ大学・ハニー・エスシェミー教授、ステレンボッシュ大学日本研究センター・スカーレット・コーネリッセン教授



（左から）ステレンボッシュ大学日本研究センター・スカーレット・コーネリッセン教授、京都大学大学院生・小佐野アコシヤ有紀さん、名古屋大学・クリスチャン・オチア准教授